

フェードル神話における神の不在

ジャン＝ガルベール・ド・カンピストロン、『ティリダート』

畠山 香奈

ジャン・ラシーヌの聖書劇『アタリー *Athalie*』がサン＝シール女学院で演じられた 1691 年に、コメディイ・フランセーズでは、近親相姦を主題とする悲劇作品『ティリダート *Tiridate*』が上演され、大きな成功を収めた¹。作者は、1683 年から 1693 年のあいだに 11 の悲劇作品を発表した劇作家、ジャン＝ガルベール・ド・カンピストロン (Jean-Galbert de Campistron, 1656-1723) である。のちにヴィクトール・ユゴーが「死んだラシーヌの傑作にカンピストロンの作品が繁茂する²」と評するように、『ティリダート』がラシーヌの『フェードル *Phèdre*』から着想を得た作品であることは間違いない。ほかにも、1684 年に初演された『アルミニウス *Arminius*³』は、ピエール・コルネイユの政治劇『ニコメド *Nicomède*』と類似する親子間の対立を軸に劇が展開するし、1685 年に初演された『アルシビアード *Alcibiade*⁴』は、ピエール・デュ・リエの『テミストクル *Thémistocle*⁵』と同じように —— デュ・リエは翻訳上の功績から、コルネイユという対立候補を抑えて 1646 年にアカデミー・フランセーズ入りを果たした⁶ ——、祖国を追放された英雄の運命をめぐって劇が展開する⁷。17 世紀を代表する作品をモデルとして劇作活動を行

¹ Jean-Galbert de Campistron, *Tiridate*, dans *Théâtre du XVII^e siècle*, t. III, textes choisis, établis, présentés et annotés par Jacques Truchet et André Blanc, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1992, Notice, p. 1285.

² Victor Hugo, « Réponse à un acte d'accusation », *Les Contemplations*, dans *Œuvres poétiques*, t. II, édition établie et présentée par Pierre Albouy, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1967, v. 118.

³ Jean-Galbert de Campistron, *Arminius, Alcibiade*, édition établie, présentée et annotée par Jean-Philippe Gasperrin et Jean-Noël Pascal, Toulouse, Société de littératures classiques, Honoré Champion, 2002.

⁴ *Ibid.*

⁵ Pierre Du Ryer, *Thémistocle*, textes établis et présentés par André Blanc, Paris, « S.T.F.M. », Klincksieck, 2000.

⁶ 雑誌『古典主義文学 *Littératures classiques*』の 42 号はピエール・デュ・リエの特集号。副題は「劇作家そして翻訳家」である。

⁷ Voir Jean-Galbert de Campistron, *Alcibiade*, *op. cit.*, annexes, pp. 195-198.

ったカンピストロンは、これまで言われてきたように、コルネイユやラシーヌを模倣する亜流の劇作家ということになるのだろうか⁸。

しかし『ティリダート』において、『フェードル』で描かれるような登場人物のあいだの対立はなく——父は息子に襲い掛かる不幸を憐れみ、妹は兄の欲望を知ると罪の意識を抱く——、ティリダートを断罪する加害者も、ティリダートが襲い掛かる犠牲者も存在しない⁹。さらに『ティリダート』が、17世紀の悲劇のなかでトポスとなった登場人物の類型を踏襲していないことは注目すべきだろう。ロラン・バルトが『ラシーヌ論』で指摘するように、窮地におちいった主人公に「逃げる」、「待つ」、「生きる」といった非悲劇的な提案をするのは腹心である¹⁰。ところが『ティリダート』において、妹に対する欲望を断ち切るために逃亡を画策するのは、腹心ではなくティリダート自身であり、その姿は超人的な意志の力をもって問題解決に臨むコルネイユ的な英雄の態度とはかけ離れている¹¹。『ティリダート』で描かれるのは、英雄的価値観の称揚や情念の激しさではなく、観客の感受性 *sensibilité* に訴えかける家族間の悲哀であって¹²、そこには古典主義悲劇とは一線を画す悲劇の在り方が提示されているのではないだろうか¹³。本稿では、この問いを仮説として、主題、登場人物、超越者という観点から『ティリダート』を検討していく。

⁸ Raymond Picard, *La Carrière de Jean Racine*, Gallimard, « NRF », 1961, pp. 500-501 ; Antoine Adam, *Histoire de la littérature française au XVII^e siècle*, t. V, Domat, 1962, pp. 268-269 ; pp. 274-276 ; Jacques Morel, *La Tragédie*, Armand Colin, « Collection U », 1968, p. 72.

⁹ Christian Delmas, « Campistron, ou la défaite du mythe sur la scène tragique », *Littératures classiques*, n° 52, 2004, pp. 162-163.

¹⁰ Roland Barthes, *Sur Racine*, Seuil, 1963, pp. 61-63. なお、該当箇所日本語訳は以下を参照。ロラン・バルト『ラシーヌ論』渡辺守章訳、みすず書房、2006年、90-94頁。また、17世紀演劇における腹心の役割については以下の文献を参照。Jacques Scherer, *La Dramaturgie classique en France*, Nizet, 1986, pp. 39-50.

¹¹ Charles Mazouer, *Le Théâtre français de l'âge classique*, l'arrière saison, t. III, Honoré Champion, pp. 123-129.

¹² Carine Barbafieri, « D'une prétendue mollesse : galanterie et modernité de Campistron », *Littératures classiques*, n° 52, 2004, pp. 165-178 ; Christian Delmas, art. cité, p. 156.

¹³ 悲劇作品のなかで描かれる不幸の位置づけの変遷と特徴については次の文献を参照。Georges Forestier, *La Tragédie française, passions tragiques et règles classiques*, Armand Colin, « Collection U », 2010, p. 214. Cf. Madeleine Lazard, *Le Théâtre en France au XVI^e siècle*, PUF, « Littératures modernes », p. 101.

I 主題

カンピストロンは『ティリダート』の序文で、作品の主題となった『聖書』の一節を次のように記している。

その後、ダビデの息子アムノンが妹のタマルに激しい恋心を抱き、その度を越した情念ゆえに病床に伏すという出来事があった。『列王記』第2巻、13章¹⁴。

しかし『聖書』の記述を演劇に仕立て上げることも、脚色することも許されないために、話の大枠は残したまま、舞台をパルティア王国に移し、「理由がついに明らかにならなかった憔悴が原因で命を落とした¹⁵」ティリダートというパルティア王国の王子を主人公としたと説明している。

つぎに作品のあらすじを見てみよう。ティリダートは、古代イランの王朝パルティア王国を建国したアルザスの長子であり¹⁶、小アジアで武勲をたてた勇士でもあるが、半年前から理由の分からない苦痛に苛まれている。また、キリキア王国の女王タレストリスは、パルティア王国の王位継承者ティリダートと婚礼をあげるためにパルティア王国にやって来たものの、約束は何度となく反故にされ、タレストリスはティリダートの心変わりを疑っている。アルザスはキリキア王国との政治的緊張を回避するために、婚儀を明日執り行うようティリダートに命じる。するとティリダートは、友人ミトラースにタレストリスとの結婚を拒む理由が、妹エリニスに対して抱く恋心にあると打ち明ける。ティリダートが祖国から逃亡しようとしていた矢先、妹と妹の婚約者アブラダートが、結婚の同意を求めてティリダートのもとにやってくる。ティリダートは嫉妬から妹に恋心を吐露してしまい、その恋心はすぐさま宮廷中に知れ渡る。ティリダートは、弟に王位継承権を譲り、タレストリ

¹⁴ Jean-Galbert de Campistron, *Tiridate, op. cit.*, préface, p. 637. なお、『聖書』における該当箇所の記事は次の通り。「その後、こういうことがあった。ダビデの子アブサロムにタマルという美しい妹がいた。ダビデの子アムノンはタマルを愛していた。しかしタマルは処女で、手出しをすることは思いもよらなかったで、妹タマルへの思いにアムノンは病気になるようであった」『聖書新共同訳』、「サムエル記下」、13章1-2節、日本聖書協会、1998年、498頁。

¹⁵ Jean-Galbert de Campistron, *Tiridate, op. cit.*, préface, p. 637.

¹⁶ ユスティヌス『地中海世界史』合阪學訳、京都大学学術出版会、西洋古典叢書、1998年、429-436頁。Campistron, *Tiridate, op. cit.*, notice, p. 285; Clément Huart, *La Perse antique et la civilisation iranienne*, La Renaissance du livre, 1925, pp. 28-130. 史実では、ティリダートはパルティア王国の建国者アルザスの息子ではなく、弟。また、カンピストロンの作品では、アルタバンの弟という設定となっているが、史実ではアルタバンはティリダートの息子である。

スには弟と結婚するように、また妹にはアブラダートと結婚するように言い遺して服毒自殺をする。

作品の主題となっている近親相姦は、16世紀にロベール・ガルニエが『イポリット *Hippolyte*¹⁷』を発表したのち、17世紀に複数の劇作家が採用したテーマである¹⁸。フェードル神話では伝統的に、近親相姦という欲望に身をゆだねるフェードルの葛藤や後悔が描かれることはなかったけれども¹⁹、フェードル神話を題材とする悲劇作品が書き換えられていく過程で、乳母の説教をとおして強調されていた道徳的側面が、当事者自身のなかで内面化されるようになったこと、そしてこの意味合いにおいて、フェードルが一義的に悪を意味する登場人物として描かれなくなったことは注目に値するだろう²⁰。実際、ガルニエの『イポリット』のなかで、フェードルは義理の息子に対する欲望を告白すると乳母から厳しくたしなめられるが²¹、同時にテゼの移り気な性質に苦しみ²²、ヴィーナスの怒りの矛先となった哀れな犠牲者として描かれている²³。また、1645年に初演されたガブリエル・ジルベールの『イポリット *Hypolite*²⁴』や1674年に発表されたマチュー・ビダールの『イポリット *Hippolyte*²⁵』では、フェードルはテゼの婚約者にすぎず、フェードルがイポリットに対して抱く欲望は近親相姦としての性質を持たない。

さらにこの系譜のなかで、1644年に初演されたトリスタン・レルミットの『クリスプの死 *La Mort de Chrispe*²⁶』は、ラシーヌの『フェードル』を準備したという意味において、とりわけ重要な作品だと言えるだろう²⁷。ローマ

¹⁷ Robert Garnier, *Hippolyte* dans *Œuvres complètes*, texte établi et présenté par Raymond Lebègue, Les Belles Lettres, 1974.

¹⁸ *Le Mythe de Phèdre, les Hippolytes français du dix-septième siècle*, textes des éditions originales de La Pinelière, de Gilbert, et de Bidar, éditions critiques avec introduction et notes par Allen G. Wood, Honoré Champion, 1996.

¹⁹ Paul Bénichou, *L'Écrivain et ses travaux*, José Corti, 1967, p. 240.

²⁰ Jean Racine, *Phèdre*, dans *Œuvres complètes*, t. I, édition présentée, établie et annotée par Georges Forestier, Gallimard, « Bibliothèque de la Pléiade », 1999, préface, p. 817.

²¹ Robert Garnier, *op. cit.*, II, vv. 477-484.

²² *Ibid.*, II, v. 391-392.

²³ Yves Giraud, « Remarques sur le personnage de Phèdre chez Robert Garnier », in *Retours du mythe*, Amsterdam, Rodopi, 1996, p. 33.

²⁴ Gabriel Gilbert, *Hypolite*, in *Le Mythe de Phèdre*, *op. cit.*, I, 1, v. 38.

²⁵ Mathieu Bidar, *Hippolyte* in *ibid.*, I, 2, v. 100.

²⁶ Tristan L'Hermitte, *La Mort de Chrispe*, in *Les Tragédies*, sous la direction de Roger Guichemerre, avec la collaboration de Claude Abraham, Jean-Pierre Chauveau, Daniela Dalla Valle, Nicole Mallet et Jacques Morel, Honoré Champion, « Champion classiques », 2009.

²⁷ Georges Forestier, « Mythe, histoire et tragédie de Crispus à *La Mort de Chrispe* », in *Mythe*

皇帝コンスタンティヌス 1 世とその妻、そして息子のあいだに起こった諍いは、1624 年に出版されたイエズス会士ニコラ・コーサンによる『聖なる宮廷²⁸』を通してひろく知られていたが、トリスタン・レルミットは、キリスト教護教論に基づく善悪二元論を中心軸とはせずに悲劇作品を作り上げた²⁹。コンスタンティヌス帝の妻は、義理の息子クリスプに恋をしているが、クリスプに恋人がいることを知ると激情に駆られて、毒が仕込まれた手袋を贈って恋敵を毒殺する。すると、その手袋に手を触れたクリスプも不慮の死を遂げる。この作品は、継母の告白、義理の息子に対する讒訴、それを鵜呑みにした父が息子の死を求めるというフェードル神話の筋立てとは完全に一致しないとはいえず³⁰ —— クリスプの死という決定的な場面を引き起こすのはコンスタンティヌス帝の妻であり、それは父と子の対立によるものではない —— 、継母の欲望と息子の死が嫉妬というモチーフによって真実らしい因果関係のなかで描き出されていることは特筆すべきである³¹。ラシーヌは『フェードル』のなかで、恋敵の存在を知って嫉妬に駆られるフェードルを描いているし³²、カンピストロンはその手法を継承して、嫉妬をティリダートの告白の動機付けとしている³³。

また、ラシーヌの『フェードル』では、女主人公とイポリットのあいだに血縁関係がないけれども —— エノーヌはテゼの死の報告を受けると、フェードルの情念を「咎めない恋³⁴」と呼ぶ —— 、『ティリダート』は、同じ血を分けた兄弟のあいだの近親相姦を主題としていること³⁵、また、この点がカンピストロンの創作であることは注目すべきだろう。カンピストロンが典拠として挙げている『サムエル記』の記述では、アムノンとタマルは腹違いの兄弟であり、アムノンの罪は、タマルに抱く恋心ではなく、アムノンが処女タマルを凌辱したのち、タマルを憎悪して棄てたことである。加えて、

et histoire dans le théâtre classique, Honoré Champion, 2002, pp. 351-370.

²⁸ Nicolas Caussin, *La Cour Sainte*, t. II, Jean du Bray, 1647. Voir Charles Mazouer, « *La Cour Sainte* du P. Caussin : de la cour au théâtre », in *La Religion des élites au XVII^e siècle*, Tübingen, Gunter Narr, 2008, pp. 141-153.

²⁹ Paul Bénichou, *op. cit.*, p. 290-295.

³⁰ Georges Forestier, *La Tragédie française, passions tragiques et règles classiques*, *op. cit.*, pp. 208-209.

³¹ Paul Bénichou, *op. cit.*, pp. 292- 293.

³² Jean Racine, *Phèdre*, *op. cit.*, IV, 4, vv. 1258-1263.

³³ Jean-Galbert de Campistron, *Tiridate*, *op. cit.*, IV, 7, v. 1030.

³⁴ Jean Racine, *Phèdre*, *op. cit.*, I, 5, v. 350.

³⁵ Jean-Galbert de Campistron, *Tiridate*, *op. cit.*, IV, 7, v. 1037.

同衾を求めるアムノンにタマルが「イスラエルでは許されないことです³⁶」と答えているように、パルティア王国に舞台を移した『ティリダート』では、近親相姦が必ずしも社会的な禁忌にふれるわけではない³⁷。それにもかかわらず、『ティリダート』では、近親相姦の欲望が「おぞまし³⁸く、「恥ずべき³⁹」ものであると繰り返されている。この点について、カンピストロンは『ティリダート』の序文のなかで次のように述べている。

もっとも常軌を逸した感情が、正しく、和らげられているのであれば、それこそが舞台のうえで大きな成功を収める感情であると確信している⁴⁰。

ここでカンピストロンが語る正しさとは、ティリダートが近親相姦という「もっとも常軌を逸した感情」に抗うことができず⁴¹、その情念に突き動かされるものの、それを恥じる主人公の道徳的な姿勢を強調することだと理解できる⁴²。「適切さ」を意識するカンピストロンの姿が垣間見られる一節だと言えるだろう⁴³。

II 登場人物

このように『ティリダート』では、典拠となった『聖書』の記述が忠実に守られているとは言い難い。しかしその代償として、ティリダートの抱く欲望に、アリストテレースが『詩学』第14章で言及する「親しい関係にある人たちのあいだ」で生じる「苦難⁴⁴」——「親しい関係」とは、血縁関係や婚姻関係のように、社会的に認知されている客観的な関係性であり、そのなかで衝突が生じた場合、スキャンダルを引き起こすような関係性であ

³⁶ 『聖書新共同訳』、「サムエル記下」、前掲書、13章12節、499頁。

³⁷ Jean Dubu, « Racine, Campistron et les *Livres des Rois* », *Littératures classiques*, n° 52, 2004, p. 211.

³⁸ Jean-Galbert de Campistron, *Tiridate, op. cit.*, IV, 7, v. 1053.

³⁹ *Ibid.*, V, 6, v. 1219.

⁴⁰ *Ibid.*, préface, p. 638.

⁴¹ *Ibid.*, II, 3, v. 488 ; vv. 523-524.

⁴² *Ibid.*, notice, p. 1287.

⁴³ Jean Dubu, art. cité, p. 212.

⁴⁴ アリストテレース『詩学』松本仁助・岡道男訳、岩波書店（岩波文庫）、第14章、54-56頁。

る⁴⁵——と同じ性質が与えられ、その結果、社会的な禁忌をおかしたティリダートの罪悪感がさらに浮き彫りにされている。

けれども、そのような罪の意識をもつティリダートに——ティリダートはミトラヌに「こんなにも罪深い友を持ったことに、お前は身を震わせるだろう（強調引用者）⁴⁶」と告げる——、パルティア王国の王位継承者としての務めを果たすように諭すアルザスも⁴⁷、妹の結婚に反対するティリダートを説得するためにやってきた弟も⁴⁸、ティリダートの苦悩を目の当たりにすると、叱責するどころか——アルザスは憔悴するティリダートに対して、パルティア王国の王位を譲渡することさえ厭わない⁴⁹——、真っ先に哀れみの感情をあらわにする。また、ティリダートは第4幕5場で恋敵アブラダートと対峙すると、嫉妬から冷酷に振る舞い、アブラダートに追放を命じるが、アブラダートの絶望を目の当たりにすると、生きるように勇気づける⁵⁰。このように『ティリダート』では、情念にとらわれた主人公が犠牲者に対して盲目的に襲い掛かることはなく、登場人物のあいだの衝突は形式的なものに過ぎない⁵¹。不幸を引き受けるのは、ティリダートひとりに集約されるのである。

17世紀の悲劇作品では、腹心はしばしば罪をおかした主人公の責任の所在を曖昧にする役割を果たすが⁵²、すでに述べたとおり、腹心が主人公に逃亡を提案すると、主人公は腹心の「意気地のない⁵³」提案を退けて、おかした罪の責任を取ろうとする⁵⁴。しかし『ティリダート』では、身分とモラルが比例関係にある従来の登場人物の類型が踏襲されておらず⁵⁵、ティリダート

⁴⁵ Aristote, *La Poétique*, texte, notes par Roselyne Dupont-Roc et Jean Lallot, Seuil, 1980, pp. 254-255.

⁴⁶ Jean-Galbert de Campistron, *Tiridate*, *op. cit.*, II, 3, v. 522.

⁴⁷ *Ibid.*, I, 7, v. 378.

⁴⁸ *Ibid.*, II, 5, v. 588.

⁴⁹ *Ibid.*, I, 6, vv. 209-224.

⁵⁰ *Ibid.*, IV, 5 v. 1009.

⁵¹ Georges Forestier, *op. cit.*, p. 206.

⁵² Paul Bénichou, *op. cit.*, p. 206.

⁵³ Voir Jean Rotrou, *Hercule mourant*, dans *Théâtre complet*, t. II, Les Belles Lettres, «S.T.F.M.», 1999, v. 861. ジャン・ロトルーの『死にゆくエルキュール』では、心ならずもエルキュールを殺害してしまったデジャニールに、侍女は残された息子のためにも逃げるよう提案する。しかし、デジャニールは侍女の「無意味な」忠告を撥ねつけて、おかした罪の責任を取ろうとする。同様のやりとりは、17世紀の悲劇作品に複数みられる。

⁵⁴ Tristan L'Hermitte, *La Mort de Chrispe*, *op. cit.*, vv. 1586-1590.

⁵⁵ Voir Maurice Descotes, «Le visage du traître dans les tragédies de Racine», *Revue*

は理性と情念の葛藤を何度か示唆するものの、宮廷を離れることで問題を解決しようとしていて——「しかし逃亡と時間がわたしの苦しみを和らげてくれるだろう⁵⁶」——、不幸を甘受するこのような消極的な姿勢から、コルネイユ的なヒロイズムは見出せない。16世紀以降、フェードル神話を題材とする悲劇作品が書き換えられていったなかで、近親相姦という欲望に身をゆだねるフェードルの罪がいかにして軽減されるかという問いがあったことはすでに見たとおりである。ところが、『ティリダート』のなかで描かれる不幸は、主人公の意志とは関係のないところにあり、この意味合いにおいて、ティリダートは不幸に対して責任を持たない犠牲者として浮かび上がるのである⁵⁷。

III 激昂から病へ

ティリダートは妹に抱く感情が明らかになってしまったことに絶望し、後悔から顔はゆがみ⁵⁸、身を震わせて、錯乱状態におちいる⁵⁹。タレストリスは、婚約が破談になり祖国への帰還が求められるという立場から、ラシーヌの『アンドロマック *Andromaque*』に登場するエルミオーヌとの類似がしばしば指摘されるが、婚約者の心変わりを知ったふたりのヒロインは全く異なる態度を取る⁶⁰。ピリュスを前に激昂するエルミオーヌとは対照的に⁶¹、タレストリスは、ティリダートの思いが明らかになったあとも、かつてと同じようにティリダートを慕い⁶²、自分の気持ちを偽ることをしなかったティリダートを責めるつもりはないと述べる⁶³。そして、ティリダートを襲った苦難を次のように哀れむ⁶⁴。

d'histoire littéraire de la France, n° 4, 1978, pp. 541-565.

⁵⁶ Jean-Galbert de Campistron, *Tiridate*, *op. cit.*, III, 3, v. 784.

⁵⁷ Jacques Morel, *op. cit.*, p. 72.

⁵⁸ Jean-Galbert de Campistron, *Tiridate*, *op. cit.*, V, 6, v. 1205.

⁵⁹ *Ibid.*, vv. 1230-1234.

⁶⁰ Jean-Galbert de Campistron, *Arminius, Alcibiade*, *op. cit.*, introduction, p. XVII. この類似は詩句についても指摘できる。Jean Racine, *Andromaque*, *op. cit.*, IV, 5, v. 1361; Jean-Galbert de Campistron, *Tiridate*, *op. cit.*, I, 4, vv. 177-178.

⁶¹ Jean Racine, *Andromaque*, *op. cit.*, IV, 5.

⁶² Jean-Galbert de Campistron, *Tiridate*, *op. cit.*, V, 4, v. 1173.

⁶³ *Ibid.*, V, 4, vv. 1175-1178.

⁶⁴ *Ibid.*, V, 7, v. 1253.

陰鬱な性質が彼の心を蝕んでいたのです。
神々の怒りが彼の心に植え付けた
不吉な恋心に不本意ながら胸を焦がし、
長い間、神々の憎しみと戦い続けて、勝者であり続けたのです⁶⁵。

ここで、ティリダートの欲望が「神々の怒り」に端を発する「性質」として理解されていることに注目しよう。実際、ティリダートは幕開けから、自分を苛む苦悩の背後に神々の存在を見て取っている。

わたしは受けて立とう、わたしの頭をめがけて
復讐に燃える神々がじきに吹き荒らす嵐を
久しく前から神々の腕が重くのしかかっていることは承知のうえ
しかしわたしの心は動じない
死期を早めることで、神々からお許しをいただけるかもしれぬ
けれどもあなたは、私の命を脅かす一撃からお逃げください
さあ、不幸な王子を捨て置いてください⁶⁶。

タレストリスの台詞と同様に、ティリダートもまたここで神々の怒りについて言及している。しかし、ティリダートはどのような罪をおかして神々の怒りを買うことになったのだろうか。友人ミトラヌに感情を吐露する次の台詞は意味深長である。

一体どのような大罪によって神々に裁かれることになったのか見当もつかない
心の裡を明かすことで、お前も巻き添えにしまうかもしれぬ
それでも怒れる神々は絶大な力をもって
知らぬ罪をおかした咎でわたしを断罪しているに違いない（強調引用者）⁶⁷。

カンピストロンが「序文」で主張しているように、もし『ティリダート』が『サムエル記』を典拠としているならば、アムノンがタマルに抱いた欲望は身に覚えのない罪に対する罰ではなく、父ダビデがウリヤの妻バト・シェバ奪って自分のものとし、ウリヤが戦場で命を落とすように仕向けたことに対する神罰である⁶⁸。ところがティリダートの台詞からは、ティリダートに襲い掛かる不幸とその原因のあいだには因果関係がないことが分かる。このこ

⁶⁵ *Ibid.*, V, 4, vv. 1179-1182.

⁶⁶ *Ibid.*, I, 4, vv. 165-171.

⁶⁷ *Ibid.*, II, 3, vv. 497-500.

⁶⁸ 『聖書新共同訳』、「サムエル記下」、前掲書、11章1-26節。

とから、作品のなかで度々言及される超越者はキリスト教の神ではなく、主人公を断罪する超越者の姿は極めて曖昧であると言わざるを得ない。このように、『ティリダート』で喚起される神々の怒りは形式的なものにすぎず、ティリダートは「陰鬱な性質」から病にかかり、周囲から哀れみの対象となる主人公として描かれている⁶⁹。超越者という点においても、『ティリダート』と『フェードル』が性質を違える作品であることが分かるだろう。

しかし、この超越者の不在は、悲劇作品のなかで描かれる解決困難な状況に打開策をもたらす⁷⁰。17世紀の悲劇作品において、過去との決別は試みられるものの往々にして失敗するが⁷¹、超越者、すなわち主人公の不幸を動機付ける過去が存在しない『ティリダート』において、ティリダートの死とその忘却が、八方ふさがりの状況に解決策をもたらしていることは興味深い⁷²。ティリダートの弟が、兄にその責苦を忘れるように誘うと——「あなたの身に起こった不幸と過去のあやまちはお忘れください⁷³」——、ティリダートは弟にタレストリスを託し、妹とアブラダートの結婚を認めて、罪人の存在は忘れ——「わたしのことは、お忘れください⁷⁴」——家族に幸福になるように言い遺して絶命する。王権をめぐる親子の諍いや、パルティア王国とキリキア王国のあいだの政治的な利害関係は形式的には言及されるものの、そこから決定的な劇展開に発展する衝突が生まれることはない。このような家族間の悲哀で幕を閉じる『ティリダート』は、古典主義悲劇の傑作から着想を得ているものの、ラシーヌの『フェードル』とは決定的に性質を違えている作品だと結論できるだろう。

結論

カンピストロンの作品は、17世紀を代表する悲劇作品の模倣と理解するのが一般的な見解である。ところが『ティリダート』は、ラシーヌの『フェードル』と同じ近親相姦を主題としているものの、そこに『フェードル』で描かれるような登場人物のあいだの衝突は存在せず、近親相姦という欲望に屈

⁶⁹ Charles Mazouer, *op. cit.*, p. 119.

⁷⁰ Jean-Galbert de Campistron, *Arminius, Alcibiade, op. cit.*, introduction, p. XXII.

⁷¹ Cf. Jean Racine, *Andromaque, op. cit.*, IV, 5, v. 1352.

⁷² この特徴はカンピストロンの他の作品にも共通する。Cf. Campistron, *Arminius, op. cit.*, V, 5, vv. 1497-1498.

⁷³ Jean-Galbert de Campistron, *Tiridate, op. cit.*, V, 7, v. 1271.

⁷⁴ *Ibid.*, V, 7, v. 1296.

する主人公は単なる哀れな犠牲者として描かれていて、ティリダートに襲い掛かる超越者の位置づけも極めて曖昧である。また、腹心から促される形ではなく、主人公が自ら逃亡を画策すること、そして、自責の念に苛まれて、憔悴した主人公が家族から病人のように哀れまれることも、フェードル神話の系譜に属する悲劇作品の伝統とは合致しない点である。このように、主人公の不幸をめぐる家族間の悲哀を描く『ティリダート』は、18世紀以降、重要な価値観のひとつとなる観客の感受性に訴えかけることを求める新しい時代の演劇の在り方を示していると言えるだろう。